



سواء سواء

s a w a s a w a



さわさわ 8号

重信房子さんを支える会 (関西)

追悼：牧野一樹さん

『さわさわ』の会員であり、また、「短歌で遊ぼう」の愚蓮として格調を重んじた歌を詠んでいた牧野一樹さんが8月8日、すい臓癌のため彼岸へ旅立たれました。ここに慎んで哀悼を捧げます。牧野一樹さんは1948年7月に生まれ、当時の正義に燃えた学生たちがそうであったように、茨城大ブントで闘い、その後、ブント神奈川の活動を担っていました。そして、赤軍派結成に到る7・6事件後、牧野さんの力で、関東学院大学全共闘やその生協と話をつけて赤軍派は神奈川を拠点に再建の闘いに入りました。7・6以降の関東地方における赤軍派の10・21闘争などを担い、11・4の大菩薩峠の合宿で急襲され、逮捕されています。以降、どんなに大変な個人史を背負って生きてきたか語り合うことはできませんでした。そして、『重信房子さんを支える会（関西）』で再会し、『さわさわ』を通して旧交を温めてきました。私が癌になった後にも自らの癌の経験を語り、励ましてくれました。

連合赤軍事件で赤軍派は組織が壊滅し、誰も支える条件のない中で一緒に闘った義理があると北朝鮮にいる仲間の帰国・救援に力を注いでいました。北朝鮮バッシングの日本で、ずっと、よど号の仲間の救援・北朝鮮民衆との交流をライフワークとしていた、その誠実さを忘れることはできません。ここに『さわさわ』編集部と私の名において牧野一樹さんに惜別の挨拶を送ります。

重信房子

『さわさわ』編集部一同

ぼくは何度も吹っ飛んだ

森本忠紀

「コウゲキ」という容赦のない言葉と共にその朗読劇は始まる。続いて、その攻撃によって受けた被害の実態と夥しい死傷者の数が次々報告されていく。去年の暮れから今年2009年の年明けにイスラエルによってなされたガザ爆撃が一パレスチナ人によって、刻々リアルタイムで世界中にメール発信された。それが恐ろしいまでの臨場感で再現される。朗読劇という、生の表現様式が持つ迫力に圧倒される。圧倒されるどころではない、ぼくは何度も吹っ飛んだ。

岡真理さんが「ガザの殺戮に『否』と言ったか」と題して、黙っていることで、ぼくたちは皆、イスラエルによるガザ殺戮の共犯者だと京都新聞で訴えられたのは今年1月のことだった。（その記事は「さわさわ」6号に転載）そして9月、同じ内容の訴えを今度は、朗読劇だ。それはまた、ガザの殺戮に対して「否」と言ったかという問いにきっぱり答えるものでもある。

この朗読劇は岡真理さんの、作・演出で「国境なき朗読者たち」というグループによって「風の音」という「居酒屋」の奥のスペースで演じられた。かおり女さんが、朗読劇があるよと教えてくれてぼくは、この朗読劇を観ることができたのだった。「素人とは思えない」という、かおり女さんの感想に、「素人でもこれだけできるということや」とぼくは切り返したが、それには訳がある。ぼくたちも、ガッサン・カナファーニの『ハイファに戻って』を朗読劇にして演じようと準備しているからだ。

本当に迫力満点の朗読劇だった。この1月にあれだけ大々的に報じられ、ぼくたちも、抗議のデモをした、ガザ爆撃だったが、もう今はまったくマスメディアから姿を消した。そんなマスメディアに支配影響されがちな頭をガツンと直撃されてぼくは観劇しながら何度も吹っ飛んだ。

この夏、ぼくは広島で同じような経験をした。田川さんに誘われて、広島8月6日の集会に参加した。「8月6日は広島の命日です。」と河野美代子さんは言われたが、毎年新聞で触れる「8月6日」には決して抱かな

かった、大きな感銘を受けた。それは、長年「ヒロシマ」を忘れていたという反省であり、また、広島へ来て、峠三吉や栗原貞子の詩がぼくにとって特別親しいものになったという経験でもあった。

ヒロシマを忘れてるのはひとりぼくだけではない。見方によっては、今や、日本中がヒロシマを忘れていると言える。広島の日が日本の命日。生きてる限りぼくたちは広島を忘れてはならないのだ。

9月26日、現在家族と共にぼくが両親と住む、わが故郷大和高田に米澤鐵志さんが被爆体験のお話をしに来て下さった。米澤さんのお話を聞いた参加者はきっと、ヒロシマが忘れられないものとなった経験をした日となったのではないだろうか。ぼくの娘二人を含めて、子供たちも数人来てくれたが、もう少し大きくなれば、この日の集會を思い出し、そしてきっと、その意味を理解することだろう。

「過ちは二度と繰り返しません」これが戦後日本の合言葉であり、平和日本のスローガンだった。ただ、何となく気恥ずかしさを覚えるのは、スローガンとしての寿命はとっくに尽きているのに、それに替わる新しいスローガンが生まれていないから。新しいスローガンは誰が作るのか。ぼくたち一人一人以外ないではないか。

重信さんは上告趣意書で「日本を平和の砦に」と訴えている。「21世紀の日本、世界に貢献する道は、日本の中から平和的に日本と世界を変革していくことだと、私たちの自己批判的再生としてとらえました。」重信さんが逮捕されたのは、そうした願いの途上だった。ぼくは、この「日本を平和の砦に」がとても気に入って、新しいスローガンに一押しだ。米澤さんのお話に先立ち、ぼくは沖縄民謡を歌わせてもらった。峠三吉の「にんげんを返せ」という詩を八重山の「とうばら一ま」のメロディーに乗せて歌うぼくの独自の試みだった。忘れん坊のぼくたちが決してヒロシマを忘れないようにしよう！そこから日本を平和の砦に！というぼくの願いを込めて。

秋天や平和の砦旗高し

—はたちの時代 前史として—

20歳というと、私たちの世代では、ポール・ニザン『アデンアラビア』（晶文社刊）の冒頭の一節が浮かびます。「ぼくは20歳だった。それが人生で最も美しいときだなんて誰にも言わせない。」20歳が、人生で最も美しい時かどうかはわからないけど、人生のわかれ目や転機の時であったように思います。少なくとも私にとって。

だから「20歳の時代」を自ら描いてみることは、意義のあることだと思っています。当時、ほとんどの人がそうであったように父母の育ててきた家族の中で育ち、又その延長のような学校や近所の小さな社会に棲みついていた私。その私は、高校を卒業して就職し社会の一員になった時、はじめて異質な価値観に、服従するをもとめられました。それが「世間」というものだと思った時、幻滅し、又、希望のよりどころとして、夜間大学の道を見つけました。その時、私は19歳でした。この時から、1965年に大学に入学し、新しい自分を信じ、夢をひらいていく、輝く時代は、19歳から20歳に始まります。

働きながら学ぶという決断。そして、大学での新しい人生。そこには、20歳の夢も正義もその可能性も掌の中にありました。サークル活動から、自治会活動、愛情や、学費闘争へ。誰にでもあった20歳の時代を語るころから、あの時の自分を捉え返してみたいと思います。

1 私のもまれてきた時代

20歳の私を語る前史として私のもまれてきた時代と環境に少しふれておきます。

私は丁度、第二次大戦の敗北のあとに生まれました。1945年9月28日です。姉が、私の誕生日の日の古い新聞をコピーして送ってくれたことがありました。新聞の一面には、「天皇陛下 マッカーサー元帥と御会談」というもので、前日に、天皇とマッカーサーの会談があり、その後の新しい日本のアメリカ支配を象徴するような記事が載っていました。戦後、食料が不足し人々は配給制では足りず近郊農家に食料を買出しし、命を繋いでいました。食べるこ

とに困る時代に、退役軍人の少佐で、もとは教師の父のちょっとした知識を活かして、素人ながらパン屋を始めながら、戦後の我が家はスタートしたようです。食糧難の時代、イースト菌を手に入れ、パンを毎日作って売ると、飛ぶように売れたようです。世田谷の馬事公苑のすぐそばの家と、少し離れたボロ市通りにあった店を子供たちの為に一つに統合しようと、父の決断で、家族は世田谷の玉電上町駅近くに引っ越しました。私が2歳～3歳のころです。そこは、大きな角地で、広い庭の一角に「日の出屋」という屋号の食料品店としてスタートしました。

庭には、大きな白桃を毎年実らせる桃の木、数えきれない実をつける無花果があり、ブランコや木のぼりの毎日です。それに父が植えた葡萄棚や、柿、栗の木がありました。隣の家の少し高い石垣の境界にむかって広がるユキノシタの中には、大きな蝦蟇（がま）が住んでいました。子供心にも大きくて、じつとみつめる蝦蟇は家族の一員のように見えたものです。昆虫や蝦蟇や蛙、鼠（ねずみ）に蚯蚓（みみず）やおけら、蜘蛛や蟻や蟻地獄。それらは子供時代の楽しい仲間でした。

日本は敗戦から、復興へと速い速度で進みはじめました。近所の一段低い地の一角には、ひしめくように、黒いコールタールを塗った家が密集していて、そこは「朝鮮人部落」と呼ばれていました。その土地の話をする時に、大人たちは、声を潜めるのが不思議でしたが、私の父は、そうではありませんでした。私は朝鮮部落の徳山さんや金さんの家に行ったら、どぶろくを貰ったり、近所にたのまれて米を買ったり、おつかいもしました。又、反対に我が家の商品を届けに行ったら、めずらしくて、家の中をのぞき不思議なアンズ（杏子）の味の飴を貰ったりしたものです。大きくなって知ることでしたが、当時は朝鮮戦争が始まり、日本共産党が武装闘争を路線として、社会革命を求めている時だったのでしょう。朝鮮人たちは晴れ着のチマチョゴリを着て胸を張って行進すると、どの家も、「あぶない！」「こわいこわい！」と家の中に入る、そんな時代です。だから、「日の出屋」が彼らと、地域の日本人とのやりとりの、つなぎの場だったようです。「日の出屋」というか、私の父が、ご近所から一目も二目も置かれていて、いろいろな相談事をうける、そのような役回りをしてい

たのでしょう。

昔から我が家は、考えたことをすべて、家族で語り合います。小さい頃から、何故、月は落ちないのか？なぜ星はうごくのか。なぜ花は咲くときを知っているのか。あらゆることを子供たちは質問し、こたえられないもののない父を誇りにしていました。又、私たち兄弟は、店番をしている父のまわりで、父の古事記や日本書紀、今昔物語や中国の様々な警句をきくのが楽しみでした。父は小さい時から、天下国家を子供と語り合うところがありました。父は、いつも、人間の価値はカネの多寡によって決まるものではない。人間の正義、世の中の為に尽くすことを教える人でした。そんな家族です。私たちは、いつもその対話の中で育ちました。当時の私は、よく交番に花を届ける子供だったようです。

朝鮮戦争後、特需で経済復興の足がかりを得た日本に、アメリカ文化生活のひとつ、スーパーマーケットが各地に出来はじめました。小さな規模のものでしたが、この大量仕入れによる安売りは、我が家のような小さな食料品店を直撃し以降、だんだん経営が成り立たなくなっていきました。丁度、父が癌の疑いで胃の摘出をおこない（開けたら胃潰瘍でした）結局、店を閉めて暮らし、その後、借金を清算して、町田へと引越して行きました。私が中学の時代です。どんどん貧しくなってしまったのです。

その為に、大学を出て、小学校の先生になりたかった私は、商業高校に行つて簿記や算盤のスキルを身につけて、就職することは、その頃もう当然のことと考えていました。中学校を卒業して働くか、と言っていたくらいでしたから。

こうして、子供時代の夢の「小学校の先生になる」ことを捨てて、商業高校に行きました。中学時代までは、少し勉強も出来て、たくさんの夢を描いていました。父の影響で、理科の大好きだった私は、生物・気象部から、中学までは化学部でした。二つ違いの姉が、中学時代に生徒会長をしていて人気もあつたので、彼女が弁論大会や、スペリングコンテストや朝礼で表彰されるのを、恥ずかしく思いつつ影響もまた、受けてきました。詩やものがたりを書いたり演劇部などです。姉のように、弁論大会に選ばれることは苦手で、避けていたのですが、「お姉さんも出来たのだから」と、中学時代は姉の活発さに、まわってくる役廻りを、逃げまわったり、しぶしぶ引き受ける感じでした。

商業高校は何だか先がみえているようで、勉強もしなくなりました。中学のように夢を描いても実現するだけの財政的裏づけがないし...と。小説を書き、渋谷（高校が渋谷にあった）の街で遊び“不良”にもなりきれずに、その分、勉強してみたりと、いう生活です。司書の先生から感想文を書くようにと言われて「橋のない川」を渡されて、読んだ時、不当な「宿命」ということに人間は尊厳をかけて闘うべきなのだ、と強く思いました。そして、その思いは常々、父の教えに強く結びつきました。それでも自分のいまを、どう生き方が結びついているのか、わからない...。そんな思いの中にいました。

そして、遊び、又、夏休み（63年）には、茅誠司東大総長の提唱した「小さな親切運動」に共感し手伝わしてほしいと参加したり、青年の主張（63年秋）に参加したり、何かをしたいけれど、何をしたいのかわからない、そんな高校時代を過ごしていました。

2 就職するという事 1964年 18歳

高校三年生になると、就職にむけて、学校の体制や指導も重視されていきました。大学進学組はH組1クラスで、A～G組まで400人位が自営業か就職試験を受けて、職場を選び、巣立っていくこととなります。昔、私たちの高校は男子校だったのですが、私の時代には共学で男女半分くらいづつだったと思います。そのうち4分の1くらいが自営業だったかも知れません。

都立一商は昔の東京府の時代の旧い商業高校で進学する者は一橋や早大、明治などの商業部に多く、又、自営業者の息子娘たちは算盤簿記を学んで、家業を継ぐ人も多くいます。算盤簿記は3級の資格をとらないと卒業できません。就職は引く手あまたです。代々、卒業生が職場で実績を残していて、真面目・勤勉と企業から求人が多いのです。当時は、一時期の証券・銀行ブームが引いて、製造業が一番人気でした。生産会社が、高度成長の中で増産増収で、企業規模を拡大していく時で、高卒と大卒を、それぞれに企業現場では必要としていたようです。私たちの高校の卒業生は、企業の、現場の業務、実務の会計簿記・管理などが求められていました。

三年生の二学期くらいから、求人票がボードに貼り出されます。会社名・規模・業種・求人数・給料・条件（算盤や簿記何級など資格技術や、容姿端麗と

か背の高さ等まで）・試験の内容（筆記・知能テスト・面接等）などが書かれています。そのボードの中から、クラスの担任に希望を申し出て、成績と照らし合わせて、他のクラスの希望者と調整しながら、まず第一希望を確定していきます。そして、高校の推薦状とともに就職志願書を提出します。

私は、求人票の中で一番給料のよかったキッコーマン（当時の社名は野田醤油）が東洋レーヨンをまず、考えました。当時、銀行や証券会社が、その年の、大体平均の給料を示すのですが、1万3500円くらいだったと思います。キッコーマンと東レは1万7500円で交通費なども支給・ボーナス3.5～4ヶ月、など書かれていたと記憶しています。当時は、望むところには行けるし学校からの推薦資格がとれる、と担任からも言われていたので、深く考えず、一年目の給料額がよいという理由で、キッコーマンへ願書を出すことにしました。条件には「155cm以上、容姿端麗」とありましたが、担任の先生が、構うことないと無視していました。本社は千葉の野田にあり、日本橋小網町に東京主張所があって、仕事場はその日本橋ということです。

就職試験は、もう忘れてしまいましたが、やはり商業簿記や算盤関連や基礎的な学科もあったと思います。その後、書類と学科審査で合格した者たちが、第二次の面接試験に再び行きます。私の高校では三人受けて一人が不合格となって、私と、もう一人が面接試験に行きました。一人の不合格の人は、勉強もよく出来る人でしたが、多分、両親が健在でなく片親だった為に落とされたのだらうと、担任の先生が言っていました。当時は、両親がそろっているかどうかなど、家庭環境のことも、うるさかったのです。

私たち高校生は、“さか毛”が流行っていて、昼休みや学校の帰りにはトイレの鏡の前で逆毛をたてて、お洒落したものです。就職試験の為の写真には、そんなことはしません。皆、髪をわざと、野暮ったく撫でつけた真面目な写真を貼って、提出します。それでも試験会場に行くと、就職の為にわざと野暮ったくきちんとしていて、あか抜けたお洒落を隠している人は、すぐわかります。大体そういう人同士は、目敏く、友人になるものです。でも、キッコーマンの合格者は、総じて真面目な人が多かったように思います。面接は、数人ずつ、趣味とか我が社を選んだ理由のようなものを聞かれたと思います。

私は、もと食料品店をやっていた、キッコーマン醤油も売っていたので親しみがあがり、給料が一番高かったからと、答えました。そんなことで、スムーズにキッコーマンに合格して入社しました。同期入社は約20人くらいの高卒に10人ほどの大卒の男たちでした。そして64年、高校の卒業式を終えて、キッコーマンの会社はまず、数日の研修を千葉の野田で行いました。4月、入社式の前だったような気がしますが、後だったかも知れません。

研修では、野田醤油の社史、工場の見学、新入社員の心構え、業界の現状などが、教えられます。「修養団」から講師が来て、女性は、男をたてて生きるとか、はじらいをもって振る舞い、笑顔もしとやかに、などという講義もありました。老男性講師の、婦女道みたいな話です。講師が去ると「古いねー、何考えてんだらう」など笑いがありました。それから、適正テストもありました。

(これは、もしかして、入社の時だったかも知れません。)夜、研修所の和室に、広々と、修学旅行のように布団を敷いて泊まったように思いますが、今となっては、それもおぼろげです。とにかく仲良くなった新入社員の他の高校から来た同年の仲間たちと、「婦女道にはまいったね」「あの話、古いわね」「今時、あんな話きく人いるのお?!」などと笑い合いました。又、大きな私たちの背丈の二倍もあるもろみの大桶に落ちて死んだ人もいるとか、野田の地元の高校出身の人が語りだすと、ネズミの死骸があったとか、キヤーワーと楽しく大騒ぎの話です。

最後の日に、この研修についての感想文を書かされました。数日して、確か入社式があったように思います。S人事課長から一人だけ呼ばれました。

「あの研修会なあ、『結構なお話でした』と、書かなかったのは君だけだよ」と言われてびっくり。え!みんな「古いわねえ、私たちにそんな話をして意味がない」など言っているのに...。「君にとって本当のことでも、それを言うて角を立てるのは、どうかな。」とS人事課長は笑って言いました。彼は、訛りのつよい高卒のたたき上げで、課長どまりの停年まじかの実直そうな人です。S課長は「ハイハイと結構なお話でしたと、従っておくものだよ。これからは気をつけなさい。」と言いました。そのあと声を潜めるように、「テストによれば、君は創造的か社交的な仕事が合う。受付か企画を考えているが、受付接客

は好きかね?」と訊かれました。「いいえ、受付接客よりも、何か業務をやってみたいです」とこたえました。呼び出されたのは私一人です。

戻ると、「どうだった?」「何?」と、みんな興味津々で訊くのです。感想文の話をする、「えー?!『古い』なんて書いたの?!」と、みんなどつと笑いました。そうか...思ったことを、そのまま言ってはいけないのか、「結構なお話でした」と、みんな本当に書いたのか...遅ればせに「世間」という現実に触れた思いでした。そして幻滅しました。

私だって、対決的に、意見を批判として書いたわけではない。我が家でも和を大切にされる方だし、そうして育ってきた。でも、自分の率直な考えをなぜ言っていないのだろう。みんなも、なぜ言わないのだろう。この戸惑いが入社の一歩になりました。

3、新入社員大学をめざす

こうして、高卒の女性が、受付や庶務、電話交換手、売上業務管理、データ計算の業務課、キーパンチャーなどの、男性の補助的な役割の多い中で、出来たばかりの食品課に配属されました。ここも男性の補佐的なしごとでしたが、責任を持てる業務でした。

キッコーマンはアメリカに進出するための輸出課を持っていましたが、カリフォルニアを目指した輸出課を通して業務提携の出来たデルモンテ社と三井物産、それに博報堂が組んで、デルモンテ商品の日本上陸計画を始めました。このデルモンテの日本での販売の為につくられたのが、食品課でした。デルモンテケチャップをどう売るか、デルモンテトマトジュースをどう日本人に飲ませるか、それを企画宣伝・販売実績を上げて、フォローアップしていく為の新しい課として出来ていました。ようは、米企業の先兵です、今から考えると。その為他の課と違って市場調査や宣伝企画、試食会のマーケット見学など博報堂などと協力して、やりがいのある仕事です。

課長はとっつきにくそうな本当はやさしい慶応ボーイ、主任は企画力も能力もある早大卒、それに営業のエリートの大卒の数人と高卒の人が営業、他に高卒の頭のよさそうな真面目な人が業務計算を仕切っています。女性は、課全体を円滑にすすめる役処で、E主任の秘書的な庶務役を、仕事の出来る女性が

一人で取り仕切っていました。10人の課です。そこに、私は配属されて主任や女性の指示に従って、業務を行いはじめました。

デルモンテを売る為に、「ケチャップのラベルを送ってきてくれた人には、先着1000名様にシームレスストッキングを一足送ります。」などと、キャンペーンを張り、売り上げを伸ばしていました。当時、貴重品だったシームレスストッキングを次々と送ったり、スーパーのディスプレイをチェックしたり、博報堂の持ってくるポスターやデザインに課の意見をまとめたりと、かなり楽しく仕事をしていました。きっと今も当時のコマーシャルソング「デルデルデルデルモンテ太陽のおくりもの」をつかっているのでしょう。

又、キッコマンでは「女性のたしなみ」を大切にすることで、お茶とお花は5時の就業終了後、週一回、半ば義務的に講習を行っていました。勿論無料です。又、野田争議として有名な労働争議が起こったことあったとかで、以降はがっちり会社役に立つ組合がつけられ、そのもとに組合活動がありました。当時はそうした由来も知らず、労働者の権利、婦人の権利の為の組合というので誘われて、顔を出してしまいましたが、「茂木社長の配慮によってこんないい環境になった」というような話で、うんざりでした。それでも「野田文学」だったか、野田本社にあった文芸サークルと交流して、詩を書いたりしていました。

そんな時、食品課の高卒の男性が、中大の夜間大学に通っていることを知りました。又、業務課の女性が一人、法政大学の夜間に通っていることも知りました。この二人の話は、吃驚するほど嬉しいものでした。「夜間大学」！世界へのつてのない我が家には、そんなことを教えてくれる人はいなかったし、知りませんでした。又、父は、自分の大学に学んだ経験から、学問は社会で学ぶ方が良く考える人だったので、大学の興味や知識もなかったのでしょうか。絶対に大学に行こう！二人の話を聞きながら、熱く決意しました。

そんな64年の秋、突然、私は病気になってしまいました。通勤の途中で、お腹の激痛に襲われてしまって気を失いそうになり、小田急線の向ヶ丘駅に途中下車して、駅の和室に連れ込まれました。町田の自宅からバス停へ→バスで小田急線の駅へ→そして町田から新宿へ→新宿から東京駅へ→東京駅の八重洲口からバスに乗って日本橋小網町へ、というのが私の通勤経

路です。いそいそでも自宅から1時間40分程かかって職場にたどり着きます。その途中の向ヶ丘遊園で降りざるを得なかったのです。会社に電話を入れて、駅長室で休んでいるうちに痛みも治まったので、町田の自宅に戻って、病院に行きました。自宅に近い、町田中央病院です。そのまま検査入院をしました。数日の検査の結果、どれも悪くないし又、痛みも、ケロリととれてしまいました。そこで、退院の支度をして、お金の払い込みを母がやりながら「最後に何も無いと思うが、産婦人科でちょっと診てもらいなさい」と医師に言われて、産婦人科で診察すると、ここで初めて、卵巣嚢腫だと診断されました。こぶしくらいの大きさの嚢腫があるので、直ぐ手術しないと又、いつ激痛に襲われるかわからないとのこと。又、病室に戻って、今度は、手術の体制となりました。この当時、日本中は東京オリンピックが始まる騒ぎの最中でした。

私は丁度良いチャンスだと、大学受験の問題集などを持ち込んで、集中して受験勉強することにしました。手術し、受験勉強に熱中していると、同部屋の患者のラジオからオリンピック中継が流れてきます。アベベが裸足で、マラソン一着になった中継やバレーボールの金メダルの応援など聞きながら又、勉強を楽しんでいました。

私はオリンピックよりも、先生になれるという人生の、目標に向かって、自分のオリンピックを実現するぞ！と、気持ちは晴れ晴れしていました。

64年、9月生まれの私は10月10日からのオリンピックの時には、19歳になっていました。私は姉や父や母に、すべての私の問題意識を語ってきました。でも、勉強して、大学に行くことは姉以外には、くわしく話しませんでした。もちろん父も母も知っていましたが、私が受験に受かってから、両親には自分から言おうと思っていました。自分の力で生きていくこと、19歳の私は一歩踏み出す希望に、その喜びを込めてすすみました。

1965年。受験して、大学に入る年。この年、私は19歳から20歳になっていく年です。

「さわさわ」会員の方々に「二十歳の時代」「二十歳代の私」をテーマに文章

を書いていただきたいと思っています。自薦、他薦を問わず「さわさわ」に掲載していきたい計画です。まずは、宮崎先生にお願いしました。

「宮崎先生のこと」 重信房子

宮崎先生は私の恩師です。一貫して私の無罪判決を確信して、傍聴、弁護、励ましと、ずっと公判を支えてくださっています。宮崎先生は、明治大学総長を歴任され、弁護士でもあり、明大のみならず、早稲田大学大学院などで、教育者として後進の育成にあたられてきました。現在も10月になれば84才という御高齢ながら、あいかわらずの元気で、「日中友好元軍人の会」の団長として、この夏は中国に招かれたように、ずっと平和友好にたずさわっておられます。又、武者小路君秀先生と共に、「朝鮮奨学会」の理事として、戦前からある朝鮮人留学生のこの機関でも活動されています。専門は国際法、人権問題などで、人権教育啓発推進センターの理事長を長くつとめられました。現在も学生野球連盟の審査室長であり、同和問題との関わりでは地対協の会長を長年務められました。

法曹界でも、正義、人権、平和問題の“頑固な”立場は広く敬愛されています。

ところで、この宮崎先生は、今から43年前の66年、明大学費値上げ反対闘争の時の、わたしたちにとっては手ごわい当局側の学生部長でした。

軍人上がりの規律にとんだ革新派という人もいれば、「平和と民主主義」を訴えるので、日共系か？ともいわれ、教職員からも、「チビッコ・ギャング」とおそれられていました。

66年11月30日学生大会で、スト権決議がなされた直後のことです。学生たちは、すぐバリケードを築きはじめました。この学生部長が突然、バリケードのかけあがってよじのぼったのです。そして、詩吟朗々、「国破れて山河あり〜」と吟じて、「学生諸君、風邪をひかないように」と大声で訴えました。私もその場に居ました。期せずして、拍手と「ナンセンス」。

後でわかったのですが、学生側にたつ「護民官」と自負する先生は、学生たちが一文の得にもならないのに、黙々と机を積んでいる無私の労働に感動した行為だったのです。

当時、宮崎学生部長と学生側2人で団交の司会をとりしきっていて、「学長先生、学生がきいているのは、そういうことではありません。」ときびしく学長につめよる宮崎先生は、拍手喝采でした。この学費闘争中、執行部として、当局と対決していたうちの一人が、大学2年の夜間部中執の私です。当時私は有名な宮崎学生部長を知っていましたが、先生は私を知りません。2000年以降公判を支えてくださって再会し、当時のことを語り合いました。「親の心、子知らず」の学費闘争でもあり、又、先生が当時強引な明大闘争の暁の収捨の裏工作の中心人物だったことも知りました。そんな恩師の「二十歳の時代」です。

私の二十歳代

宮崎繁樹

私は、1925年10月21日に、新潟県新発田市中曾根で生まれた。戦後、生家を訪れた時、トタン屋根のあまりにも小さな家なので、哑然とした。一（復員）20歳の誕生日は、1945年（昭和20年）、千葉県山武郡大磯村於幾の農家で迎えた。近衛歩兵第9聯隊（範第3825部隊）残置隊第3小隊長だった。敗戦時、私は19歳10カ月で未成年だったが、すでに陸軍少尉で、その部隊の第一機関銃中隊の小隊長と幹部候補生の教育隊長を兼ねており、九十九里浜でアメリカ軍を迎え撃つ猛訓練中だった。大日本帝国を一人で背負っているような気持ちだった私は、大隊長から幹部候補生の教育計画の提出を求められ、教育目標として「わが国運を既墜に回らすに足る人材を育成せんとす」などと書き、「それは大風呂敷過ぎる。「初級将校たるに必要な資質を養成する」位したらどうかね」とたしなめられたりした。私にはこのような身の程をしらぬ誇大妄想狂的傾向がある。敗戦後は、連隊旗手を命ぜられ、それを奉焼した。

8月30日マッカーサーが厚木に到着。9月2日東京湾ミズリ一艦上で降伏文書の署名が行われた。部隊解散（復員）後、兵器を米軍に引渡すための

要員として、現地に残っていたわけである。特にやることもなく、農家の稲刈りや脱穀などの手伝いもした。

11月30日最終的に復員し、幸いに焼残った世田谷の自宅に帰宅した。自暴自棄のような心境のあとで「さてこれからどうするか」と考えた。実は、敗戦直前(7月)に陸軍士官学校を卒業したばかりで、同校卒業者は専門学校卒業と同資格とされ大学受験資格があったので、引続き勉強してみようと思った。軍隊の学校の教育は偏っていることが自覚出来ていたから、もっと広く勉強しなおそうと思ったのだった。

陸軍省(復員省)が最後に良いことをしてくれたと思うのは、私のような進学希望者のために「補習」の機会を与えてくれたことだった。国分寺駅から多摩湖線で一つ目の現在「一橋学園前」に、当時は別の駅名だったと思うが、戦時中陸軍経理学校があり、その校舎で主に外国語の補習(補習会と呼んだと思う)をしてくれたのだった。私は名古屋の幼年学校でドイツ語(士官学校では中国語とロシア語)を履修していたので、ドイツ語のクラスに参加した。勿論上級生も一緒だった。先生は、もと陸軍の諸学校や高等学校の先生で、私のクラスは吹田順助先生とあと一人の方だった。テキストは多分、当時の高等学校で使われたもので、一つは *Individuum und Gesellschaft*(個人と社会)、あとの一つは、ヘルマン・パールの短編集だった。前者には「社会心理学者の説くところによれば、個人が考えるのではなく(それまで、その人の頭脳に影響を与えてきた)社会が考えるのである」というような記述があった。後者には、第一次大戦参加者の感想として「我々は、我々が正しい神の意思に基いて戦ったと信じてきた。しかし、その神は、まやかしの神であり、血塗られた神であった」というような記述があった。私は目から鱗が落ちる思いがした。学ぶことが全て新鮮であり、砂漠の砂の中に水が滲み込むように新しい知識が吸収出来た。しかし、それでもまだ、当時私は熱烈な天皇教信者だった。それを解きほぐしてくれたのは、同じクラスで陸士では2年先輩(56期)の鈴木隆正さんだった。私は彼の家まで押しかけて真剣になって彼に食いが下がった。私が天皇は「神」だと言うと、鈴木さんは「君はまだそんなことを信じているのかね」と言

って、色々な科学的根拠から皇国史観の誤りを指摘された、私は最後には悔し涙を流しながら、鈴木さんの説の正しさを認めざるをえなかった。天皇裕仁が人間宣言をしたのは、1946年(昭和21年)の年頭詔書においてだった。補習会の時期は、私にとっての、正にルネッサンスの時期だった。

その後、旧軍人だった人の中には(いや一般の民衆の中にも)、戦後、思想的に「何事も学ばなかった、何事も棄てなかった」ような人たちがいることに驚かせられるが、私は、戦後間もない時期に、この補習会で、良き師、良き友を得たことを嬉しく思う。

二(進学)戦争は正しい者が勝つのではなく、強い者が勝つのである。私は第二次世界大戦に原子爆弾によってアメリカに敗れたことを残念に思い、理工学部に進み、原子爆弾以上のものを発明してアメリカに復讐しようと思った。当時父はまだ戦地(ビルマ)におり、進路について相談する人が無かったので、父と親交があり国会議員もしたことのある人を訪ねて、上記のような抱負を開陳した。その人は多分驚いて「これは危険人物だな」とでも思われたのかもしれない。「君、日本は科学技術においてアメリカに劣っているわけではないのですよ、むしろ、それを伸ばす政治体制に欠陥があるのです。すべからく社会科学、法律学などを学んではどうですか」と言われた。単純な私は、すぐそれを信じてしまい、法学部に進むことにした。

1946年(昭和21年)の大学入学試験のトップを切ったのは早稲田大学だったと思う。母方の叔父が早稲田で学んでいたのが早速、早稲田を受験した。ところが、補習会でドイツ語を学んでいた友人たちが、私と共に全部落第だった。私もガックリした。その次週に東大の入学試験があった。ところが、早稲田に合格した殆どの人たちが入学手続きを取らなかった。その人たちにとって早稲田は単なる小手調べで、入学手続きなどはとらず、さっさと本命の東大を受験したのだった。あわてた早稲田大学は東大試験日に第二次入学試験を行うことにした。迷ったが、負けず嫌いの私は、早稲田を再び受験した。つまり東大を受験する機会を失したのだった。今度の早稲田の入試には自信があった。しかし、結果は、またしても「落第」だ

った。不思議に思って、当時早稲田の法学部長だった大浜信泉先生に疎開先で交際があり知人だった叔父から問い合わせさせて貰った。当時の入学試験は、どの大学も「外国語」と「論文(作文)」だった。大浜先生の回答は「宮崎君の答案は、外国語はまずまずだったが、論文がとても悪かった」というのだった。私は論文にこそ自信があったのである。論文のテーマは「本学において法学を学ぶ理由」というようなものだった。私は、自信をもって自分の抱負を展開、大書した「アメリカをどうしても原子爆弾以上の兵器で撃滅する必要がある。その科学を振興するために日本の社会・法制度を抜本的に改革しなければならない。そのために私は、法学を学ぶのである」。そこまでは、まあまあ、許される。だが、筆が走ったのだ。「入学しようという学生がこのような真摯な決意でいるのであるから、教授の先生方も、是非禪をきっちり締めて指導に当たって頂きたい」と締めくくった。今、考えれば厚顔不遜、受験生にあるまじき態度である。しかし、本人は心底、そう思い込んでいたのだ。その答案を読まれた先生は、啞然とされたのだろう「こいつは頭がおかしいのではないか」「こんなのを入学させたらとんでもないことになる」という意見と、「面白い」という意見に分かれたそうである。しかし、結局、「落第」となった。

しかし、その早稲田大学法学部と大学院において、後に1966年から1985年までの20年間も、私が、教員として学生の教育にあたり、その間、国際法主任までも務めたことを思うと、感無量でもある。早稲田の第一次試験を落ちて東大を受験した補導会のドイツ語の友人たちは、殆ど、東大に合格していた。

私が明治大学に入学したのは、近所に住んでいた明治大学の応援団の学生の勧誘によるものだ。早稲田に落第して落胆していた私に「明治大学は素晴らしい大学だ」、早稲田や慶応に勝るとも劣らぬ大学だ。立派な先生をよく知っているからその先生に話せば間違いなく合格だよ。などと薦めてくれた。その先生と一緒に訪ねていったら豊島区の焼け跡のバラックに住んでおられた、当時事務長の水越順作という方だった。会うと「明治大学は素晴らしい大学なのだ」と説明して下さった。だが、訊ねてみると受験

科目は英語と論文だという、「私は英語は麻布中学で1年間学んだだけですから駄目ですよ」と言ったら、それなら答案用紙にそう書いて出せばいいですよ、という話だった。半信半疑で受験したら、英語の問題は、君主主義、貴族主義、民主主義の比較を論じたもので、単語や構文はドイツ語と近似しており、一応書いて提出した。

合否発表前に水越さんを応援団の学生と訪ねていったら、「立派に合格点を取っていますよ、しかも素晴らしい成績だ」とのことだった。あとで聞くと頼みに行く学生は合否ストレスかあまり成績が良くない学生が多いとのことだった。入学したら、学級委員というのが学校側から何名か指名された。その殆どは、もと専門部出身で、戦時中学級主任の野田孝明先生(民法担当)と石川島に学徒動員で行っていたという旧知の学生たちらしく、新顔は、私だけだった。

私たちの学年(昭和21年4月入学)は、どの大学でも、正規の(つまり同年3月卒の)高校・大学予科の卒業生はおらず(その人たちは繰り上げ卒業で、すでに2年生になっていた)、復員が遅れたか、専門部卒業か、私のような傍系の学生が主流だった。また、占領軍の指令で、すべての団体・集合体について正規軍人(つまり陸軍士官学校(陸士)出身者)は、1割を超えてはならないし、そのような者が会合することも禁ずるとされていた。だから、どの大学の新生も、陸士出身者は1割未満に抑えられていたことになる。そんなことに頓着せずに、私は、明治大学に入学した陸士出身者に呼びかけて、当時すざらん通りにあった「萬崎百貨店」のレストランで会合を持った。ところが、やはり密告者がいたらしく、GHQ(アメリカ占領軍司令部)に呼ばれて、出席者、会合目的、会合内容などを執拗に質問され油を絞られた。占領軍も占領の当初は、軍関係者の動向に神経質になっていたのだろう。

父の死後しばらくして、その『手記』が出て来た。読んでみると母あてのものらしく「繁樹は、その希望によって軍の学校にでも、一般の学校にでも進学させて良いが、私立大学には行かせないように」と書いてあった。父が池袋に下宿していた頃、近所の私立大学の学生の自墮落ぶりを見聞し

た結果らしかった。しかし、父が復員・帰国した時に、私はすでに私立の明治大学に入学してしまっており、父はガッカリしたのかもしれない。でも、父は、そのことを、口にも顔にも出すことは無かった。

三（学生生活）戦争直後は、衣食住すべてにおいて困窮を極めていた。教室に空調の設備があるはずはなく、冬はダルマストーブ一つで、先生方も学生たちも外套をはおって講義し講義を聞いた。学生服を着ているのは僅かで、殆どは陸軍・海軍の復員服だった。食堂では外食券を持って行かねば食物は入手出来ず、学校に「両端に電極をつけた木箱」を持ってきて、中に小麦粉を練ったものを詰め「にわかパン蒸器」のようなもので食事している者がいたり、放課後教室が物々交換の場所になったりしていた。それでも毎日教室に出れるのは良いほうで、アルバイトかどちらが本職か判らない生活をしている学生も多数いた。

四（自治活動）そのような中でも、学生の自治組織は構成された。明治大学では、当時学生自治会は「明治大学学友会」と称し、その機関として学生大会（代議員会）、総務委員会（常任代議員会）、中央執行委員会を置いていた。その下に各運動部を統括する「体育会」、各文芸部を統括する「文化部連合会（文連）」を置いていた。夜間部（2部）については「学苑会」があり、「研究部連合会（研連）」が置かれていた。各学部の各クラスからは何名かの自治会委員にあたる「総務委員」を出し、会の実質的運営、自治会費の配分などをしていた。

学友会規則は「われ等明治大学学生は、1新しい時代の胎動期にあたって、学園のあらゆる民主的な努力を結集して、学生生活を擁護する。2大学の最高の目的である学問の自由確立のための一切の障害を排除する。3明治大学学生の総意をもって社会正義の前衛たらんとする。われらは、われわれの名誉にかけ、全力をあげてこの理想と目的を達成することを誓う。……」としていた。

私も総務委員に選ばれ、会議に出席した。1947年のことと記憶するが「授業料値上げ反対」が問題になった。もちろん、反対派が多数だった。しかし、私は「授業料上げ賛成」を主張し激論した。私は、前に述べたように、

当時、勉強することが楽しくてならなかった。新しい知識に飢えていた。新しい岩波文庫が出る、哲学辞典が出ると言えば、徹夜でも並んで買い求めた。街に本が無いという時代だった。だから図書館に足しげく通い、図書館の職員と親しくなって書庫に入れて貰えるようになり、当時は蔵書も少なかったからだろうが、何処にどの本があるかも判るようになった。クラシックな感じの図書閲覧室やその上階にあった自習室の雰囲気も好ましかった。だから、学費を多少上げてでも、もっと図書を整備し、大学の教育研究条件を整備して、素晴らしい大学にして貰いたかった。

そういうことを述べて「授業料値上げ賛成」の論陣をはった、そのせいか、その年の「授業料反対闘争」は盛り上がらなかった。当然、私は「進歩的學生」たちからは、反動派呼ばわりされた。しかし、私心は全く無かったから、反対派の諸君とも、気持よく付き合い、卒業後は、互いに親しく協力するようになった。日本共産党明大細胞の闘士だった三角君などは、卒業後神田印刷株式会社という会社を作る時、私に取締役に任じてくれと言ってきた。賛成して就任したのだが、彼はあまり経営的才覚が無かったのか、第一回株主総会を待たずして倒産してしまったのは残念だった。

もともと、当時の学生たちは殆どが軍隊生活の経験があり、また、それぞれに、戦後の経済的荒波を乗り切っていたから、なまじ先生方よりは「社会的経験」に富んでいたかもしれず、学生時代のアルバイトが本職になり、成功した人たちも少なくない。

五（岐阜屋の開業）私は経済的才覚は無く、幸い家が焼けなかったので、封鎖された預金から学資を出して貰って真面目に学校に通っていた。「父さえ帰って来れば」と思っていた。子どもの頃からの印象では、父は万能であり、父は無限な経済力を持っているスーパーマンのように思っていた（実質は、毎月給与を貰っていたのだけれど、子どもには無限の資力があるように思えたのだった）。

その父が、1947年6月に、ようやく戦地（ビルマ）から帰国してきた。私は、品川まで出迎えに行った。しかし、そこに見た父は、やせ衰え、杖をついた一老人だった。それまで画いていた大きな父の巨像が急速に萎んだ

思いがした。戦争での激戦、苦闘、補給の枯渇、戦後の抑留、敗戦による精神的打撃、そのすべてが、父から精気を奪っていた。「これはいかん」そう思った。それまで父に期待していただけに、失望も大きかった。

丁度その頃、大学に通っている小田急線の窓から、下北沢の駅の周辺に新しく駅前マーケット（といってもバラックに毛の生えた程度だったが）が建てられつつあった。私は父に話してその一軒を入手し商売を始めたいと提案した。私には経験も資力も見通しも無かったが、売り食いではもう限界が来ていることは明らかであり、何とか生きてゆく道を切開かねばという切実な思いがそうさせたのだ。わが家は当時、母と大学生の私、小学生の弟で、稼ぎ手は一人もおらず、ただ封鎖された預金を下して使っているばかりで、売食いするにも格別の資産は無く、底はもう見えていたのだ。

父は残った僅かばかりの資産を処分し、何とかマーケット一軒分の購入費を捻出してくれた。マーケットの売主は経験の無さそうな大学生が買主と知って怪訝な顔をしたが、当時は混乱の時代だったから売却に賛成してくれた。さて、何の商売をするか、もう資金は殆ど無い。私は、最初その時は夏だったので「かき氷屋」をしようと思った。それなら「かき氷機」と毎日仕入れる氷代だけで商売出来る。しかし、父は、「それも一案だが、すぐ涼しくなる。また、大学に通うのはどうするのだ。それよりは、郷里の岐阜の物産を仕入れて売ったらどうだろう。それなら、私にも店番の手伝いは出来るからね」と言ってくれた。

早速、父母の郷里である岐阜の親戚・知人に連絡をとり、岐阜提灯、岐阜団扇、扇子、美濃紙、網代傘、瀬戸物、などを仕入れ、店名も最初は「美濃屋」としようかと思ったが、近所にすでにその名の店があるので「岐阜屋」と名付けて開店した。当時は、まだ物が不足していた時代だったので、素人商売でも、何とかやってゆけた。もっとも、雨が降れば傘を持って駅前に飛んで行き、団扇や扇子を持って駿河台下の小間物屋に卸しに歩き、自転車の間屋から瀬戸物や磨き砂を運び、岐阜まで網代傘の仕入れに行ったりもした。大晦日などは、ことのほか忙しく、家族総出で商売に励

んだ。

平素は、私が店の二階（といっても天井もなく梁の上を鼠が走るのを見ながら）に泊まり、朝早く父が起しに来て一緒にシャッターを上げ品物を出し、私は家に戻って朝食後登校し、母が朝食後店を手伝いに行き、午後私が下校して店を手伝い、母が帰宅して夕食の用意をする。父と協力して店を仕舞ってから帰宅して夕食を取り、夜私が店に戻って店の二階に泊まる、という生活を続けた。その間に必要に迫られて、元帳、仕訳帳、現金出納簿など簿記の基本も学んだ。

その後、店頭から売れない品が次々と消えてゆき、最後には、瀬戸物だけが残って「瀬戸物屋」になってしまった。私は、その後、弁護士や大学の仕事が次第に忙しくなり、店のほうは、父と母、後に姉が続けてくれた。師団長まで勤めた父が、最後まで、嫌な顔もせず、岐阜屋の店番をしてくれたことに、感謝し、また心苦しく思う。

六（特別研究生）入学して間も無く、掲示板に「法科特別研究生募集」の広告を見た。別にお金がかかるわけでもないようだし、「研究」という言葉に引かれて受験したら、合格した。何をするのか判らなかったが、受かってみて、それが高等文官試験の受験指導室であることが判った。高等文官試験には、行政科、外交科、司法科の別があり、それは「資格試験」だった。当時は占領下で国交が無いので外交科試験は無かった。私は、司法科試験のあとは行政科試験に挑戦してみるつもりだったが、翌年行政科試験は採用試験である公務員試験に変わってしまった。研究室の他の多くの人が司法科試験を受けるといので、私も、まずそれに挑戦してみることにした。翌年1947年、二年生の時に合格した。陸士卒業生でその年に合格したのは、私と東大の寺島芳一郎（56期）の二人だった。もう一人いたという話だが不詳である。すぐに司法修習生になっては（給与も出る）という話もあったが、現役将校だった者は公職追放とされ国家から給与を貰う司法修習生になれるのか、その時は疑義もあり、卒業までにもっと勉強したいという気持ちもあったので、卒業まで延ばすことにした。大学は首席で卒業し、記念品に時計を貰った。

私のヒロシマ8月6日

寺田道男

炎天下の8月6日を忘れることはない。田舎（県北のS市）に住む私でも、広島に生まれれば、折りにふれ被爆の惨状を聞かされ、誰でも「原爆」には怒りをもっていた。今から40数年前の1967年8月6日、「高校生になったら連れて行ってやる」との約束で、日共系の国労に連れられて「原水協」の世界大会に参加した。壇上には世界各国から主義者らが並んでいた。「共産主義者になろう」と決めた。しかし、会場入り口で主催者側と広大の学生らの論争「もめごとに」に遭遇し、その場で密かに思った今度は「トロッキストになろう」と。その日は黙って日共の人に連れて帰ってもらった。遠い昔の、しかも高校1年の夏だった。時代はベトナム反戦、学生運動が高揚を極めるときだった。

翌年の8月5、6日、広大の学生が中心の「8・6広島反戦集会」に参加した。会場は白メットでいっぱいだった。それから翌年も、そして大学1年の時白メットで炎天下、機動隊とぶつかり激しいデモを繰り返した。コールは、なぜか「安保粉碎!」「沖縄奪還!」だったように記憶している。

それから、39年目の2009年8月6日、その「8・6広島反戦集会」の流れをくむ「8・6ヒロシマー平和の夕べ」に「戻ってきた」。激しいデモは無かった。優しく、時折激しい旋律のピアノの調べと、年をとった人たちの、静かで、それでいて「腹の底から原爆に怒りを燃やす」トークが続いた。被爆2世の河野美代子さんの「ヒロシマの継承と連帯を考える」平和講演を聴きながら、あの70年安保闘争の真っ只中、原爆手帳を持つ祖父がガンで死んだこと、7年前に親父が、6年前に妹が、それぞれガンで死んだことを思い出していた（ガンと「原爆」の因果関係は分からない）。

本当に久しぶりの8月6日、仕事で休めないことや参加したい「ヒロシマ集会」がなく、8・6ヒロシマは遠ざかっていた。同じ時期、私には、30年続けている「8・15を問いつける京都集会」を重ねていた。しかし忘れかけていた「ヒロシマの反戦・平和」に今一度、向き合うことができた。それ

ばかりか、私の闘いの出発は、今もヒロシマであることを確認することができた。

私には、田舎に高齢の母親と、同じ歳の叔母がいる。叔母は原爆手帳を持ちこの10年入院療養中、もちろん医療費は無償。母親も「私も原爆手帳をもらっておけばよかった」と証人がいなくなった今頃、戦争・被爆体験を話す。まだ、元気な母親だが、戦中戦後は、この集会で講演した青木忠さんの「空襲の地より」で語られた日立造船向島工場で働く学徒動員だった。

この日の集会は、「家族」に思いをよせることにもなったが、何よりも3年前に京都で立ち上げた反戦・反貧困・反差別共同行動（きょうと）に集う人たちも、多く参加していて、主催者でもない私にとって、なぜか、京都で闘い続けてきたことと、わだかまりがあった故郷（こころ）の闘いが、この日、結びついたように感じた1日でもあった。

ところで、まだ、地球には2400発の核兵器がある。来年も8・6ヒロシマだ。その前に、10月18日、京都の「反戦・反貧困・反差別共同行動in京都」で再会しよう。

（京都「天皇制を問う」講座実行委員会委員）

歴史的政権交代の総選挙

選挙のもたらした今後の闘い

米澤鐵志

政権交代がついに実現し民主、社民、国民の連立政権が樹立した。

私はこの選挙が始まる前に民主党のマニフェストを読んで、民主中心の連立政権ができれば日本は大きく変わる可能性を含む第一歩を踏み出すのではないかと感じた。

マニフェストにはまず皆さん（国民）の政治という視点があり、護憲も大事な九条を平和主義と規定し国民に定着しているとし（第二項は触れていない）冒頭に「憲法とは公権力の行使を制限するために主権者が定めたる根本基本である」と規定し、教育基本法が改悪された考え方、すなわち「一時の内閣が、その目指すべき社会像やみずからの重視する、伝統・価

値をうたったり、国民に道徳や義務を課するための規範ではありません」とした上に「自由闊達な憲法論議を」としている。

マニフェストには生活重視の視点が一貫しており、まず明治以来の官僚主義支配の根絶を目指している。

マニフェストには衆議院比例区の80削減や経済界に甘い姿勢など容認できないものもあるが、情報公開や子育て予算、民生（医療・介護）年金改革など、われわれの要求に沿ったものが多く含まれている。高速道路の無料化、子育て予算の高所得者への一律配分など検討する必要のあるものも多い。

今まで政治の場で首相や大臣が発言される言葉は官僚の作った作文であり自分の言葉ではない、だから平素会話で使ったことのない「未曾有」や「踏襲」のような言葉がうっかり出てくる。

しかし鳩山総理や民主党の幹部たちはメモなしで自分の言葉で語っている国連総会の「核廃絶・地球温暖化」についての発言は今までの日本の首相の発言からはかんがえられない突出したものであった。

まだこの文を書いているときは組閣から一週間しかたっておらず、具体的な法案など出ていないが、すでに麻生内閣で決められていた独立行政法人などへの官僚の10月1日人事をストップしたり、先々月麻生がごり押しした補正予算の全面見直しをしたり、あのタカ派の前原国交相の精力的に動いているのを見ると、第二自民党と民主を評価していた私たちも、良いものはよいと見直す必要がある。

半世紀以上続いた自民党政権、特に小泉改革による国民生活の破壊など倒れて当然の政権がやっと崩壊し、政治はどうしようもないと傍観者になっていた人々に、やればできると希望を持たせ、政治がお茶の間に入ってきた状況は歓迎すべきものである。しかし市民運動やあらゆる変革にかかわっていたわれわれには、私たちの運動によって自公政権が倒されたのではなく、また主役の民主党に対しほとんど、いや全くといってもよいぐらい影響力がないことは残念なことである。

私たちは選挙で社民党の服部良一君を推薦しその当選に努力し結果を出

したが、東京で保坂氏を落選させたように社民党の前途は多難以上のものがあり、来夏の参院選後が政局の大きな転換点になろう。

もうひとつ今度の選挙での特徴は今まで見向きもしなかった沖縄の普天間基地の返還と辺野古移転が争点の一つになり、鳩山、岡田をして県外移転を言わせたのも、ウチナンチューの戦いが結果的に沖縄全県から自公の当選者を出させなかった。また先の県会議員選挙の結果が大きく影響したことは間違いない。しかし北沢防衛大臣は県外移転は困難と、早くもアドバルーンをあげており沖縄県民を支援する世論づくりの運動が絶対不可欠であろう。

可能な人は機会を見て辺野古や高江に足を運ぶことも大切だろう。

核問題の情報公開がテーブルに載っているが、司法の可視化だけでなく、あらゆる情報が徹底的に公開されれば、行政一般が明朗化し、税金のムダ使いや汚職の横行を食い止められるだろう。

官僚支配で特別なものに文科省がある、民主のマニフェストにはほとんど触れられていないが、文科省こそあの勤務評定、道徳教育以来一貫して憲法、教育基本法を精神を踏みにじり、教員の自主性を封じ、平和教育を敵視し、教育基本法改悪という暴挙をなした。

文部官僚こそ憲法の精神に叛き、日の丸・君が代教育を押し付け日本の民主主義を破壊してきたものとして告発していく必要がある。

また、民主党のマニフェストにない軍事費削減を、「福祉にまわせ」と働きかけることが重要である。

ともあれかつてわが国では想像できなかった事態が進行しており、市民運動や大衆運動の立場から政治に介入して行こうではないか。

09年10月1日

原子爆弾被爆体験証言者

追記 なお死刑廃止議員連盟加盟の千葉景子氏が法務大臣に就任したが、マスコミの一部や自民党議員の中には死刑執行を迫り法相に圧力をかけているが、大臣の職権に圧力をかけさせてはならない。

短歌で遊ぼう(7)

さわ女と「寄っといで短歌」

題詠～「身体」～

<さわ女>

獄の片隅にせいたかあわだちそうが咲き始めました。秋ですね。この花と青空を見るとほっとしています。みなさんお変わりありませんか。8月にさわさわの仲間、愚蓮さんが癌で亡くなりました。彼の一首を哀悼を込めて、まずここに再び掲げます。前に「短歌で遊ぼう」に載った一首です。

「今さらに山にかえるなほととぎす命つないで吾れと越ゆらん」合掌

私の癌治療は続いています。大阪医療刑の処方抗癌剤6クールが9月上旬に終わりましたが、腫瘍マーカーは9月2日の裁決で、また最高値を更新してしまいました。それで、東拘で新しい抗癌剤を処方されて9月中旬から、飲み始めたのですがこれが副作用が少しきついものでした。(吐き気・動悸・口内膨れ)手術の時も切ったのは痛かったけど、「病人」という気はしなかったのに、「やっとな病人になったかな…」とっていました。でも二週間の服用がちょうど過ぎた、10月1日にはそれも治まってきて、ほっとしています。薬が身体に慣れたか、ガンが勝ったのか、それとも抗癌剤が勝ったのか、今のところわかりませんが、病人気分から脱しつつあります。もうすぐ最高裁判決もあり、今の日本の司法の仕組みでは、被告の主張は、アラブでいうところの、ラクダが針の穴を通るようなものかも知れません。判決後の有罪の可能性と条件を考えると、今できるだけ宿題を終えておこうと張り切っています。

この秋、10-18、3年目の円山公園反戦平和の集いですね。「さわさわ」の仲間たちが、ちょうど「さわさわ」を起こした頃に、昔の10-21反戦集会の復権を企画して始めたものでした。今年はまた新しい仲間の交流と団結の集いとなるでしょう。エールを送りつつ、私も「さわさわ」の仲間の一人として駆けつける気分です。みなさんの健闘をいひます。今

回も短歌をありがとうございます。どの一首も一句も、みんなの実力に一む、へえーなるほど、すごいな、と学んでばかり。添削どころではありませんでした。ささやかな感想を以下記します。

影法師 (岐阜刑)

青く澄んだ空には翳雲がゆっくり流れ、向かいの山からはときおり、百舌の声が聞かれるこの頃となりましたが、ふうさん始め「さわさわ」の会員のみなさまにはその後いかがおすごしでしょうか。それぞれに様々な課題を背負い大変な日々ではありますが、お互い、望みを捨てずに元気に頑張りましょう。さて毎回楽しく読ませていただきました、ふうさんの私の京都・大阪物語が8号をもって最終回になってしまったこととても残念に思っております。しかしながら、この、私の京都・大阪物語を読むことによって、ふうさんの生い立ちを知ることができたことことは、ふうさんに、より一步近づけたようで個人的には喜んでおります。いずれにしても闘病生活の中でこれだけの執筆活動を続けることがどれだけ大変な作業であったことかと思うと、ふうさんの頑張りに感謝しなければなりません。本当に長い間ありがとうございます。また短歌コーナーでいただいたコメントの中でも(癌はなかなか元気でわが体内で飛び跳ねているかと思えます。)とあり、まさに病状が一進一退を繰り返していることが伺えますので、これからはしっかりと治療に専念して一日も早く元気になっていただきたいものです。特に体内の癌の細胞を消滅させるために抗生物質を二週間余りも投与する時が何度かあるとか。その際相当の苦しみが伴うと聞いております。しかし、それもこれも裁判で無罪を勝ち取るためには何が何でもこの病気を克服しなければなりません。どうか、娘さんや友人、そして支援者の私達のために頑張ってください。さて、毎回拙い短歌や俳句を快く評価していただきありがとうございます。さらに小菅の舎房は窓がありませんので、ふうさんに少しでも季節の移ろいを届けることができるように、実生活はもとより、テレビやラジオ放送の情報を参考にして作品作りに取り組んでおります。これからも拙い作品ばかりで恐縮ですがよろしくお願ひします。

- (1) 飽きもせずなるなるさんの絵を描いて何時かは届けと願いを込めて
- (2) この季節冷凍鯛焼き懐かしく小菅のふうさんお元気ですか
- (3) ふうさんに氷善哉の一杯も届けてやりたい夏の午後です
- (4) 吾娘一人幸せにできずこの我は獄舎の隅で詫びております
- (5) 友ありて命を繋ぐこの頃は何時かは外れる無期囚の手枷
- (6) 国会で政策抜きの野次りあい遠きになりし日本の明日は
- (7) 裁判は言うに及ばず病魔にも勝たねばならぬ君が使命なり
- (8) 手を繋ぎ黄花コスモスの迷路行くすぎななずなの麦わら帽子
- (9) 離れても共に生きれる喜びを両手を合わせて仏に感謝
- (10) 叶うならミクロの戦士に変身し君に宿りし痛退治をせん

俳句

- (1) 空睨みコンバイン駆る麦の畑
- (2) 蜘蛛の巣やひと雨後の玉飾り
- (3) 梅雨明けて木立の陰に法師蟬
- (4) 梅雨晴れや巣立ちの朝の鶯^{うり}の声
- (5) 燕雛押しくら饅頭餌強請
- (6) 青蛙跳びつき麦の穂を揺らす
- (7) 鎌振れば草の匂いの風となり
- (8) 蜻蛉や灯りに誘われ窓を打つ
- (9) 職人は泥も磨けば玉となり
- (10) 青空に向日葵似合う九十九里

<さわ女>

私は二十代で国を離れ、岐阜にも縁がないのですが、森本さんの描く、畝傍山や、影帽師さんの描く風景に、場所を想い描くのが楽しいものです。短歌以前にお便りの山並みと空を想像しています。いつも暖かい励ましありがとうございます。「氷善哉」は好物です。「冷凍鯛焼き」は知りませんがおいしそうですね。小菅は新舎廊下の冷房と、房内空気循環の寒さで、私には暑い夏ではありませんでした。(もともと寒がり)(5)

は「さわさわ」のつながりが気持ちを前向きに育てていて、嬉しいことですし、(4)のような素直な思いが零れるのも前向きに生きるが故だと思います。(1)や(8)(9)に、森本ファミリーとも「さわさわ」とも暖かい交流を実感します。(8)がとても好きです。

俳句はいつも影帽師さんの想像力の見せどころで、鮮やかですね。(2)は、美しい風景、私も獄の運動房に出た時に、はっと、その美しさに見とれたことがあります。又、旧舎にいた時(8)の同じ体験も見ました。

(6)も(7)も、絵のように匂うように、浮かびます。

どの俳句もいいですね。(2)と(6)、(7)がとりわけ好きです。とくにうれしいのは(5)で、さわさわと、命を繋ぎ、友情が広々と育っていることです。

M・M (岐阜刑)

私は「さわさわ」に出会い信頼と癒しに会う。迷いただよい余儀ない時を過ごす日々の中で、さわ女さんは継続してコメントしてくれています。浅学非才な私の句に「素顔を見て思わず笑ってしまいました」と滑稽な身振りをしてくださったことにとっても喜びを感じました。

- (1) 葬母^{むすめ}の写真届きし手にすればほほえむ遺影に心痛めり
- (2) 兎に角もこの世に生まれ生かされてよしとすべきか獄^{じごく}に思う
- (3) さわ女よりコメント読みし苦しみを歌に変えゆくさわ女の技だ

俳句

- (1) 板垣に懐き看板昭和の日
- (2) 入梅や亡き母の齡越えて生く
- (3) 夏来る旅する荷物軽くなる

<さわ女>

M・Mさんの明るさや素直さが、短歌に(1)(2)とあらわれています。(1)は、きっと獄中の私もそうですが、私の友人たち、獄の中にも外にもいる友人たちも、同じ心境の人も多いと思います。今になってみると、何故、父や、母の喜ぶようなこと(それが今からおもうと往々にして、よりよい手だてだったりしています)が、できなかったのかな…と胸痛む時

があります。M・Mさんも同じような悔いが、深くありますね。母への侘びの思いが深い程、自分にはねかえりますね。生かされた現実を前向きにと、あれこれ夢想するのも楽しいですよ。きっとそれは又、次の力になります。俳句は(2)がだんぜん好きです。M・Mさんは、幼い頃は母の期待の息子だったのでしょう？良い時代の絆が目に見えかけます。

Y・M (千葉刑)

- (1) 伸びぬ腕成長と共に復活し火傷のあとも勲章にならず
- (2) 眼が良いと老眼は早いと脅す医師そんなことだけやたらとあたる

<さわ女>

(1)(2)とも題詠ですね。昔の傷も、思い出深く、あれこれ描かれておられる様子。獄中から見ると、かつての、よかったことも、ネガティブなことが当たるなあ、と思っておられる様子。でも心配無用。老眼？きつとDNAにかかわっていますよ。私の母は老眼あったけれど、父は78才までなかったし、私も、今も老眼ないのに姉には、老眼あり。それぞれです。でも老眼も悪いことではないのでは？映画の脚本を描きつつ、前向きに！

A・Y (岐阜刑)

「さわさわ」の皆様こんにちは。はじめまして。参加させていただくのが初めての私ですが、きっかけは親友である影帽師君の紹介です。どうかよろしく願い致します。私のような非力なものでも枯れ木も山の賑わいと思っただけならば幸いです。

俳句

- (1) 可憐花なのに継子の尻ぬぐい
- (2) かくれんぼやがて寝息の童子かな
- (3) 道祖さま白いべべ着て綿帽子
- (4) この便り今日も心の雨宿り
- (5) 初雪やでんぐり返しの童子かな

<さわ女>

わざわざありがとうございます。岐阜には、わが友、泉水さんも居ります。影帽師さんの音頭で「岐阜文芸部」ができそうですね。期待していま

す。(1)はソバの花に似て、「継子の尻ぬぐい」は、本当に可憐な花ですね。子供のころ、「継子の尻ぬぐい」とか「弟切草」とか、生物専門の父から、名前の由来をききながら植物採集する夏休みの、楽しかったことを思い出します。(2)とか(5)が、好きです。(3)もいい。子供を見守る目線にもよめるし、又、自分の幼年時代の、遊んだ時代のことにも重なるし、おっとり、やさしい人柄がうかがえます。(4)も心に響きます。俳句は短歌よりも多弁なときもありますね。

ごめんねジロー

驚天動地てんやわんや急転回。かねて治療中の「顎関節症」が何のことはない片頬悪性腫瘍であることが判明。8月30日桂の三菱京都病院に入院抗癌剤治療を開始しております。今すぐどうのこうのというわけではないということで、三たびゾンビをめざし、腹をくくって治療に耐え、のんびり養生する所存です。

- (1) これ以上毀傷せざるを期するとも納得いけば自爆も辞せず
(題詠の「身体」、早速8月8日につくるも、それどころやなくなってしまいました。なだめすかして、一刻も早く元気になりたいと思っています。)
- (2) 「食う」と「寝る」これができれば大丈夫おっともひとつ「出す」ができなきゃ
- (3) からだ張りつけてみせます落とし前ドス抜く健さんどよめく館内
(あれは40数年前、池袋の「人生座」だったか「文芸座」だったか…。あの日私はなぜか孤独でさみしかった。)

<さわ女>

おどろきました。早期治療体制なのでしょうか？全快を心から祈ります。ジローさんのたよりにしている愛妻が、心ひろく支えてくれそうですね。どうか、観念のみ激しく夢想し身体は穏やかにおすごしください。(1)は片頬を脅かしているような歌。私も体内の管(食道胃腸)にむかって、時々叱咤したりおどしたりしています。)でも自爆は、覚悟で、それはそれ。寛容におねがいします。北風より太陽政策がやっぱりいいです。(2)は自身

の体調に静かな覚悟を、少し笑いで味つけつつ生きていこうと前向きなしぶとさが感じられます。(3)は今にして思う心境でしょうか。「あの日私はなぜか孤独でさみしかった」と。当時はそれぞれの闘いの中で、これでいいのか?という思いを、だれもが抱いていて、思い切るか彷徨するか、だったと思います。池袋や新宿の違いはあっても。

(1)(2)(3)共、かえってぐんと、生への能動性に目覚めたジローさんが浮かびます。どうか、よい入院生活を。入院中は、深呼吸が力をたくわえてくれます。深呼吸の大事さは吸うでなくて、吐ききることです。小さいころの父の教えですが。そして、「自分物語」を入院中でも書き記して下さい。「20才の時代」のように!

哲蕉

- (1) まるっこく太く短い拇指は母親に似て愛ほしくもあり
- (2) 方哉も啄木も見たわが手とは如何ばかりの詠嘆もたらしか
- (3) 寒き日もうだる暑さの夏の日も続ける気持ちが足心鍛ゆ
- (4) 人は言う心身共に健康と身体は動くが気が休まらず
- (5) 顔写真撮る機会ありてじっと見るこれも歴史かシワと頭髪
- (6) 同じ事何度も繰り返す母の「手紙」を読みし現在なら解る
- (7) 痛み来るウォーキング中の事故身体が跳んだ記憶が飛んだ
- (8) 一瞬の悪魔の時間過ぎ行きて恐怖も記憶も奪い去りおり
- (9) ズキズキと痛む頭に手を当てりゃゴボツと突き出たタンコブと血
- (10) 記憶戻り見知らぬ顔が我をのぞく警察呼んだ救急車呼んだ

<さわ女>

哲蕉さんは、ウォーキング中に、交通事故に遭遇されて今も入院中です。相手が一方的に悪いので、これから保障交渉とのこと。地域でも、大学時代に、つちかった団交の交渉力で、組合も、たばねてきたねばり腰、どうかきっちりとおとしまえをつけて下さい。それにしても奇跡的に命びろいされました。病床からの投稿です。

(1)～(6)までが、事故前の題詠で、(7)～(10)が、自己をベットの上で詠んでいるものです。「(7)～(10)は一気呵成に詠みました。

こんな時はスラスラ読めるものですね。自然の自分自身の感動の中から生まれるものが本当の歌心だと思います。どれ程の入院生活になるかは、わかりませんが、病床でゆっくりとあれこれ勉強したいと思います。命に別状はありませんので、心配無用です。」とありました。全快を祈ります。

(1)～(5)は、自分のみじかな身体から、生活実感があふれていて、とってもいいと思います。ぐんと、歌の質的向上中ですね。贈った秋山清の『短歌入門』が効いているようですね。(1)はととてもリアルで好きです。

(7)～(10)は、その事故の一瞬をきっちり自分をもう一人の自分が見ているように詠んでいて、すべてはまっています、一気呵成に詠めたのは、心の中からの思いを詠んだからですね。入院一ヶ月近い最近の作は余裕の歌心ですよ。9月22日の手紙の5首のうちから2首を紹介します。

- (11) 生と死のドラマおりなす病院は明るい陽も差す暗い翳さす
 - (12) 誘われて笑顔のステキな療法士吾娘の様に会話がはずむ
- (11)と(12)は病院で、けっこう楽しく、しぶとくやっている様子がでています。どうか、きっちりなおして下さい。

華灯

- (1) 逢えずとも同じ季地に縄文の炎の如き彼岸花
- (2) 音沈む晩夏の山に黒アゲハ羽を打つ音聞く空耳か
- (3) 風と陽に抗い垂れず媚売らず麦屹立し胸はれと告ぐ
- (4) あかぎれに暗く歪みし妻が爪癒える頃には百日紅咲く
- (5) 白き裸身を揺さぶる香り闇に湧く一町先に金木犀あり
- (6) モジリアニの黒い瞳の女首傾げ訝しく問う「何を迷うか」

<さわ女>

歌人の華灯さんは暦の節句ごとに詠んでおられます。これはみごとな彼岸花の写真に添えられた秋分の歌です。何千年も年を越えて、同じところに同じ季節にこの秋分、縄文の時代から、人々はどんな思いでこの炎の花を見つめてきたのでしょうか「同じ季地に」人間の肉体的生命のサイクルでは逢えなくても彼岸花は同時代のように縄文や歴史の季を伝えてくれますね。花の炎もまた、洞察も深く美しい。その前に届いた、白露の時に送ってく

れた歌も秀逸でした。「憎めども隅に居座る故郷を埋めたくなる夏の夕陽に」

(2)は黒アゲハから、逆に恐ろしいほどの静寂が伝わってきます。(3)は、あっさりと、仕事を止めて“吟遊歌人”のように生きている華灯さんの姿勢そのものが見えます。(6)には妻への無言の慈しみを感じました。そうだ、華灯さんの妻の歌は初ですね。いい響きです。(5)もいい歌ですね。どの歌も題詠でありながら、もっとそこから、大きな物語を描いていて、イメージが広がります。私は、彼岸花の(1)の歌と(5)、(6)が好きです。

すみ女

重信さんは、うんと遠いところにおられる方と思っていました。「私の京都大阪物語」に出てくる地名の、なんと身近なこと。ひょっとしたら、玉出商店街ですれ違っていたかもしれませんね。編集長をはじめさわさに登場する方々の、生きることへの真剣さとは程遠いところにいる私です。場違いを承知で投稿させて戴きました。よろしく。

- (1) 湯上がりに母の遺せしパジャマ着る鏡にうつる姿似るめり
- (2) 三線をつまびく指のかるやかに君の想ひは広島の夏
- (3) すずむしの朝な夕なに羽化し居り透けし姿の神さびて見ゆ
- (4) サンドルの先より見えし若き爪くがねしろがね黄金白金空をも写し

<さわ女>

まあ、ご近所できっとすれ違っていましたね。値引き交渉しているおばさんを見ましたか？それはきっと私です。アラブ時代のくせで、すぐ値引き交渉してしまう私です。でも玉出商店街ではそれも通じて、いいところでした。今後ともこちらこそよろしく。(1)は同感の世代ですね。私もしみじみ鏡を見ては感じる思いです。“母の遺せしパジャマ着る”が具体的でこの一首を引き立て、似た姿を鮮やかに示しています。(2)は森本さんの8・6と9・26の集いの思いを適確にとらえていて、歌にしておられるのでしょうか。見事に題詠として詠みあげておられます。(4)も視線がやはり歌を詠む人の目ですね。“サンドルの先より見えし若き爪”がこの歌の鋭い感覚のやさしさをひきたてているように思います。(3)すずむしの音ねではなく羽化とは！飼かっておられるのですね。“神さびて見ゆ”に自然の摂理に対するおののきと感動が伝わって

きます。やさしい人ですね。豊かな感性をお持ちの歌人はきっと、日常の中でこれまでも詠んでこられたなみなみならぬ力量をみました。

田川晴信

大和路に被爆体験語る友非核反戦の旗を降ろさず

<さわ女>

26日に森本さんの地元で、友人たちを集ってもらって、米澤さんの「核と人類は共存できない」のお話を聞く会を持たれていた時の思いですね。お便りに、「忠紀君の沖縄民謡、最高でしたヨ。3曲目は、八重山諸島の調べに、峠三吉さんの“ちちをかえせ、ははをかえせ、としよりをかえせ、こどもをかえせ、わたしをかえせ、わたしにつながるにんげんをかえせ…”の詩を載せて思わず、目頭を押さえた私です。隣の席はかおり女さんでした。」とありました。

この体験の感動が、一首に零れたものですね。さわやかな、みんなの思いと決意が、響くような一首、あかるくてみごとですね。

原啓介

- (1) 八月に君はひとりで死に向かい吾は息子と病院中を彷徨い歩き
- (2) 癌僧し友を滅ぼす敵の魔手苛烈に向かう姿焼きつき
- (3) 会えば言うきつと何かを伝えるとその顔ばかり吾は思いし
- (4) ひとり死ぬ誰にも会わずひとり死ぬいつに決めたか強き意志なり
- (5) 吾もまた口惜しきかな彼が思う術世に伝うなき
- (6) インターに送られし彼悲しくも照る日曇る日於母影の中
- (7) 行く鳥の羽ばたきに似て最後まで他人のために成らんとぞ在り
- (8) 何ひとついとわぬ彼の生き様にさわやかな風一陣来る
- (9) 夏に逝く紅蓮のほむらあかあかと封印したる思いにも似て
- (10) 形見にと息をきらしつ届けたるハイファイセット吾に残りて

<さわ女>

8月に亡くなった愚蓮さんを、読んだものです。10首ありましたが、原さんと愚蓮さんのつながる思いの5首を選ばせていただきました。愚蓮さんは、私も、69年に短い間、共に闘った同志です。原さんのどの歌にも、愚蓮さんの、他人の為にいとわぬ生き方に共感した思いと彼への餞別が、あふれて

います。私の知る彼と、重ねながら、原さんのうたで確かめあっている思いです。(10)には、彼の情景がうかびます。(8)(9)は、とても完成された歌心が、一首になっているように思います。愚蓮さんにとってやりたいことは、明確にあったので無念な旅立ちに違いありません。でも友のインターナショナルの歌に送られて逝ったこと、幸せと思ひ込むことにします。原さんの文に「なくなる当日、京大病院まで出向きましたが、逢えませんでした。残念です。静かで知的な雰囲気のあるオシャレな左翼でした。」とあります。合掌。

森本忠紀

- (1) 秋の日の大和盆地を見はるかす葛の葉揺らし清しき風吹く
 - (2) 鳴き終わる時が命の終る時蟬の如くに生きたし吾も
 - (3) 残生は平和の紫旗となり列島狭しと駆け巡るべし
 - (4) わがために治療を施し鍼灸師くれたる注意は「頭を使い過ぎ」
 - (5) 美しき忘れ形見を目の前に逝きたる友の内面偲ぶ
 - (6) 葛藤は生きたる証し誠実に親娘関係築きし友よ
 - (7) わが大和に平和の語り部迎えんと公民館に人々集う
 - (8) 一時間半立ちっ放しに笑顔見せ平和を語る七十路の友
 - (9) 参加者にお礼の電話を掛け終えて集會主催の荷をば降ろしぬ
 - (10) 嬉しきは大和高田と広島を繋ぐ架け橋生まれたること
- (1) にんげんを返せと叫ぶ夏幾たび
 - (2) ふるさとの人ら美し盆踊り
 - (3) やさしきはおみなの花
 - (4) 隣人は地上に果てなし曼珠沙華
 - (5) 仲秋や父住み慣れし家に笑む

<さわ女>

森本さんのいきいきとした夏から秋の様子、そしてその姿から映し出された(1)(2)(3)の情景や想いが伝わってきます。8月6日ヒロシマへ、そして、地元での、初の平和をねがう集い「米澤さんのお話を聞く会」の準備と、その成功、その中から更に平和の実現を、足もとから実行していこうと広くみわたしている森本さんの姿勢が(7)～(10)へと、零れ

れています。田川さんの感慨にもつながっています。どの歌も、確信に満ちていますね。さわさわ1号をひっぱり出して、森本さんの巻頭の「創刊の辞をを述べるつもりが…の中にかかれていた「持病のうつの話」は「さわさわ」をやりだしてから、ふっとんでいきますね。鬱のお客さんも、森本さんの外に向かう多忙な力に、寄りつかなくなったようです。でも(4)のように、注意を。「頭を使いすぎる」って、あるかしら…(私はない?!)(5)(6)は、原さん同様、愚蓮さんを追悼した思いです。(5)の内容は、「無念」におきかえてみたいところです。

俳句は、やはり、どの句にも広島に行き人々と、交流しあったことで、平和のねがいが決然となった思いが伝わります。”曼珠沙華いわずにおれぬことあるも”という一句と共に、森本さんは、ヒロシマのこと、米澤さんのお話のこと、手紙で書いていました。どの句も命あふれる句です。

さわ女の題詠

- (1) 身体伸ばし青空つかもうと背のびするあわだち草の咲きはじむ秋
- (2) あおぞらに諸手を挙げて燃える秋10・18 反戦の誓い
- (3) 怯懦のうた叫びにうかぶ白き喉女区房の夜更け静寂
- (4) 錆びついた記憶のひだをおしひろげ友の遺髪之行先探る
- (5) 右の瞳母に似ている左の瞳父に似ている鏡のわたしは
- (6) きっちりとプラスチック越しに手を重ね夢の中でも面会10分
- (7) 親指を弓張りに立てて秋の空想い届けとサムアップ独り

次回「短歌で遊ぼう」の題詠は「光」です。例によって、来年の歌会始めの題詠をいただきました。

【編集後記】もう3年前のことになりますが、重信さんを支える会の資金作りの足しにと、陶芸教室に通ってコーヒーカップを焼いたことがあります。絵付けはつれあいの名美子がやってくれ、重信さんが描いた絵をそっくりに模写しました。それを見た重信さんがてっきり自分が描いた絵だと思って、「どんな技術でコーヒーカップに焼き付けることができるの？」とびっくりされました。おかげさまで作った分は完売して手元にはありません。表紙のコーヒーカップはその名残で、写真にとっておいたものです。また陶芸教室に通って、もっともっと、たくさんコーヒーカップを作りたいものです。／先日高校の同窓会があり、重信さんを支援していることを述べる文章を、ほんの名刺代わりに配りました。同窓会の席を、重信支援を訴える場に利用したかった？そうではなく、自身の来し方を述べようとすれば、私の場合は重信さん抜きには語れない、ただそれだけの理由です。そうでないと、せっかく会って、“懐かしい”で終わったのでは、あまりにもったいない気がしたからです。一ヶ月が経って、私は「自分史語ろう会」を呼びかけました。同窓の有志が集まって自分史の合同冊子を作ることができたらいいなあと夢を描いています。／大阪のH神社の夏祭りに沖縄民謡で呼ばれて、行って来ました。色々なジャンルの音楽グループが数組、自らの音楽を演奏して、グループごとに投銭を貰うシステムになっています。思いの外、たくさんのお金を貰うことができました。やる前は意識しなかったのですが、たくさんのお金を貰うと、くださった気持ちを決しておろそかにはできないなあと、身の引き締まる思いをしています。／次号9号は10月刊行予定です。お便り、投稿等は9月中にお送りいただきますよう。(森本)



販売は1冊300円です。

なるべく年間購読をお願いします。

送料込みで年会費は2000円です。

(郵便振替口座 00920-2169764

さわさわの会)

〒635-0061

大和高田市磯野東町3-27 森本忠紀

Tel/Fax 0745-22-4002

mail : toppinsyan@kpa.biglobe.ne.jp